

19. アメリカ在住記 追記 - 2

私は日本に帰国して不可解な事がいくつかあると前述した。しかしながら、逆に日本の生活と慣習に慣れてくると、アメリカにおける日常の生活に不可解さ、あるいは不便さを感じる事も多くある事に気がつく。まずはアメリカの郵便料金である。アメリカでは二年前から外国向け普通便（船便）がなくなった。全て航空便扱いだ。大きな引越しを除いて、例えば雑誌とか書籍をアメリカから日本へ送ろうとすると、目の玉が飛び出るほどかかるのだ。例えば 250 ページぐらいの一冊の本を郵送したいなら、30 ドル

(2,700 円) は必要とする。本など航空便で送る必要はない。日本からだ、船便で送れるから、同じぐらいの本なら 500 円ぐらいなのだ。これはどう考えても不合理、不公平である。私はこの事をニュージャージー州から選ばれた国会議員（下院）を通して異議を申し立てた。しかし、手紙受領確認の返答が来ただけでその後全く何の連絡もない。その為、郵政局に直接問い正したところ、郵政事業赤字削減の為の政策だと言う。嫌なら送るな、と言う事なのであろう。この政策で一番困窮している人々は南米諸国から来ている低所得移民達だ。家族を残して来た本国に何も送れなくなったのだ。アメリカから送られてくるものは大小にかかわらず全てが航空便なのだ。これは高くつくし、彼らの生活に響くのである。

アメリカは世界中からの移民で成り立っている。しかし今日現在、およそ 1,200 万人の不法移民達がアメリカに在住しているのだ。その約 80% がメキシコを含む南米諸国から来ている。彼らを一般にヒスパニック系民族と言ひ、スペイン語を話す。勿論彼らの殆どはパスポートを所持しておらず、社会保障番号すら所持していない。しかし不思議な事に彼らの子供たちの殆ど全部がアメリカ市民権（アメリカ本土で出生した者は親の国籍、米国在住資格に関係なく市民権が得られる）を有するのだ。今現在でも毎年何万と云うこのヒスパニック系民族がメキシコとアメリカの国境を、砂漠を超え、秘密トンネルをくぐり、あるいはリオ・グランデ河を横切ってアメリカに侵入して来ているのだ。膨大な現金を潜り屋に支払い、命を捨てる覚悟で浸入して来るのだ。メキシコを含む南米諸国は余りにも貧困な為、彼らはアメリカにさへ何とかたどり着けばそこが天国だと信じているのだ。この不法民族は良く働く。社会保障番号がないから、法定最低賃金の半分でも文句を言わずに働くのである。多くはメキシコ・アメリカ国境沿いの諸州の農場で極秘で働いているのだ。ある者は都市に潜り込んでレストランの皿洗い、野菜荒い等をして生計を立てるが、彼等は小さなアパートを借りてグループでごろ寝の状態で寝泊りして生きているのだ。業者にとって不法在住市民を採用する事は勿論違法である。しかしこれを罰する事が出来ないアメリカ、これがアメリカの矛盾の一つである。したがってアメリカの移民法に基づいて正規にアメリカの在住資格を取ろうとするまともな外国人が逆になかなか取得出来ないでいるのである。さて、見事に潜入に成功したこの違法移民たちは間違っても本国には帰還しないのが実情なのだ。この事に関してのみ何百と云うエピソードがある。

結論であるが、アメリカ連邦政府はこの違法、不法民族のコントロールに完敗した。実際問題としてこの違法民族の労働力がない限り、アメリカの農業は大打撃を受ける。少

なくとも南部諸州の農業は壊滅する。故にアメリカは現実の問題として彼らに無条件で在住許可や、パスポート所持の者たちには永住権を与えようとしているが、その方法が実に不合理、且つ不公平であるのだ。その一つに『永住権宝くじ』がある。在住資格がなんであれ、たとえ違法在住の身分であっても『永住権宝くじ』に当たると永住権が取得出来る、と云うのである。これは真面目に法に基づいて申請する者たちに対する侮辱である。こんな不合理な瀬戸際政策が功を成すとは思われない。呆れてものが言えなくなる。しかしながら、この不法移民たちはなかなか応募しない。合法在住者となると、納税の義務が生じる。最低賃金法の適用で解雇されるのが落ちだからだ。そうすると、本国に残して来た家族に仕送りが出来なくなる、等の問題が生じるからだ。たとえこの不法民族を捕えても、アメリカ連邦政府、つまり移民局は予算がなく彼らを本国へ強制送還出来ないのだ。かといって刑務所送りにも出来ない。悪い事には彼らは英語を話さない。アメリカは大問題を抱えている。

アメリカは又、現在カナダとメキシコとの間に FTA を結んでいる。FTA とは Free Trade Agreement の事で関税なしの自由貿易協定の意味である。元々の表面的な理由は特に後進国メキシコの経済を助け、同時に国境沿いの州の農業技術の向上等を上げていたが、実際はメキシコから乱入して来る違法ヒスパニック系民族の越境防止にあった。しかし、それは実に甘い軽率なアメリカ政府の方針で見事に失敗している。この協定はカーター、ブッシュ、クリントン元大統領達の賛同を得ていたが、アメリカにとって良い事は何もなかったのだ。貧乏隣国メキシコ、この国の経済を少しでも援助したいと云うクリスチャン大統領の良心的な計らいであったのだが、先を読めなかったこの三大統領に私は失望した。又、日本政府もアメリカとの FTA 条約を考慮しているが、この目的は日本政府の買い付け制度によってアメリカの農業生産物の輸入を計り、よってそれから得る利潤を膨大な財源とし、公約の財源確保の一部とする事にあると私はらんだ。しかし現政権のアメリカ連邦政府はこの日本の意図は既に周知である。まともにこれを施行すれば日本の農業、特に米作、牧畜業は大打撃をこうむる事は必至である。

さて私はアメリカは契約の国であると言った。その契約を逆に市民が破った時はどうなるのかを例を挙げて紹介したい。

レーガン大統領の航空管制塔員解雇の話である。1981年8月、レーガン大統領は17,500人の管制塔員中、13,000人のストライキ参加者に対し11,000人を解雇した。航空管制塔とは全米の飛行場に設置されている指令塔である。そこから離着陸する航空機に指令を出す人を航空管制塔員と云う。彼らは国家公務員である為、ストライキの行使は違法である。しかし彼らの労組は40時間勤務を32時間に短縮、50%のベース・アップを要求した。当時の航空管制塔員の給与は一般市民の夢の上の夢なる高給であったが、余りにも重要な職務であったので、過去何年にもわたって彼らの要求は全て受け入れられ、制御がつかないほどの状態になっていたのだ。にも増してこの途方もない要求。この航空管制塔員によるストライキ行使が意味するものはアメリカ全土の飛行場閉鎖であった。レーガン大統領は頭に来た。贅沢三昧の航空管制塔員、レーガン大統領は組合側の要求を全て拒否し、24時間以内の職場復帰命令を出した。命令に服従しなかった

11,000 人は Pink Slip (解雇通知) を受け取った。解雇された彼等は永久に再採用される事はなかったのである。解雇された管制塔員の誰一人としてこの最悪な状態は予期していなかったのだ。結果として、組合は解散し、無職になった管制塔員家族の地に落ちた日常生活が TV などであからさまに報道され、哀れに思ったが、国家との契約違反のなれの果て、同情する市民はいなかった。レーガン大統領は 6,000 人の軍航空管制塔員を動員し、訓練管制塔員を増加する事によって、この危機を脱し、飛行場は一港たりとも閉鎖する事はなかった。この大胆な処置、その後の企業ストライキも鳴りを潜めた。

さて私は、マスコミの力はあなどれない、と豚風邪流行の為に日本中の通勤者の顔が白いマスクに覆われたばかりでなく、私は計画していたアメリカ旅行も危うくなった事を前述した。そしてアメリカ人はパニックに陥った日本人をあざけ笑った。ではアメリカ人はどうであろうか。実はアメリカ人はもっとひどい。世紀が変わろうとしていた 1999 年、私が実際にこの目で観察したエピソードを紹介しよう。

10 月、秋も深くなりつゝあったが、20 世紀も又終わりに近づいていた。新聞や TV は電力会社や水道会社が年を越せないかも知れない事を報道していた。それは 2000 年 1 月 1 日をもって、アメリカ全土は暗闇となる事であった。理由は電力会社のコンピューターが古く、1999 の『99』から 2000 の『00』にセット出来ないと言うのが理由で、故に電力会社の発電機が停止すると云う事だった。私はそれを電力会社の発電所に電話を入れて確認したから事実であった。新しいシステムの導入はこの段階では間に合わない。しかしながら、常識的に判断すると、そんな馬鹿な事が起こるわけがない。しかし、私が行っていた教会では有識人を迎えてその Impact を講義したり、大騒ぎであった。

ある日運転中にある家の Garage (車庫) のドアが開いてるのでふと見たら、老人夫婦が中にあるものを整頓していたが、余りにも凄惨な様子なので車を止めて、失礼ですが、と言って眺めさせてもらった。そこには約 100 個の 1 ガロン (3.8 リットル) 入り飲料水ボトル、10 個の大きなプロパン・ガスタンク、20 個の 5 ガロン (約 20 リットル) 入りのガソリタンク、500 個もあるかと思われるありとあらゆる種類の缶詰、箱にびっしり入った電池、等々、想像を絶する日用品が貯蔵されていた。彼らは春になるまで、電気がなくとも、水がなくとも生き延びられる準備をしていたのだ。私は Media の恐ろしさを改めて認識した。ちなみに私は、全く何の準備もしなかった。

この老夫婦、これらの日用品をどの様に処置したのかは分からない。しかし、それよりも彼らは 1 月 1 日が来て何も起こらなかったのを知ってどう思ったのだろうか。発電所の説明では、とりあえず全ての発電機の日付を 1972 年にセットするので年越えには問題はないと言っていた。

1999 年の大晦日、20 世紀最後の Count down が始まり、私はテレビでニューヨーク市の新世紀のクス球が降りてくるのを見ていた。そしてそのクス玉が割れ、A Happy New Year! A Happy New Century! と歓喜の声が挙るのを聞いた。停電も起こらなかった。水道の水も出た。部屋のパソコンも始動していた。外からパンパンパンと新年を祝う花火

の音があちらこちらから聞こえて来た。そして何事もなかったかのように新世紀 2000 年が始まった。